



月報だよりの原稿は毎月20日締切、翌月に発行の「天文月報」に掲載いたします。校正をお願いしておりますので、締切日よりなるべく早めにお申込みください。

e-mailで toukou@geppou.asj.or.jp宛にお送りください。折り返し、受領の連絡をいたします。

人事公募結果

東京大学大学院理学系研究科附属 天文学教育研究センター教員（女性）

1. 掲載号：2023年02月（第116巻2号）
2. 結果（前所属）：江草芙実（東京大学大学院理学系研究科 助教）
3. 2023年6月1日

人事公募

東京大学大学院理学系研究科附属 天文学教育研究センター教員

1. 募集ポストおよび人員：助教1名
2. 所属部局および勤務地：
 - (1) 所属部局：東京大学大学院理学系研究科附属天文学教育研究センター
 - (2) 勤務地：東京都三鷹市大沢2-21-1
3. 専門分野：電波天文学
4. 職務内容：

当センターは銀河天文学・電波天文学・恒星物理学・時間軸天文学の4部門および木曾観測所・アタカマ観測所で構成され、南米チリ・アタカマでTAO6.5 m望遠鏡プロジェクトを推進しています。これらの研究部門・プロジェクトおよび天文学専攻とも協調しつつ、電波天文学分野において観測的研究（新たな観測的研究を可能とする機器や観測・解析手法の開発研究も含む）を主導する方を求めます。また天文学専攻の専任教員として大学院および学部教育も担当していただきます。

5. (1) 着任時期：決定後できるだけ早い時期
- (2) 任期：なし
6. 応募資格：博士の学位を有すること
7. 提出書類：(1) 履歴書、(2) これまでの研究教育業績の概要

- (3) 研究業績目録（査読付きとそれ以外を分けること）
- (4) 主要論文別刷（3編以内）、(5) 着任後の研究計画と抱負
- (6) 本人について意見を述べられる方3名の氏名と連絡先

※書類選考を通過した方には面接を行うことがあります。

8. 応募締切：2023年6月20日（火）必着
9. 提出先・問合わせ先：

- (1) 応募書類を1つのPDFにまとめたうえで、以下のメールアドレスに送付のこと。
メールの件名は「電波助教応募」とすること。
メール送付後、3日以内に受信確認のメールが届かない場合は下記問い合わせ先まで電話すること。

メール送付先：App2023-radio@ioa.s.u-tokyo.ac.jp

- (2) 宛先：東京大学大学院理学系研究科天文学教育研究センターセンター長 土居 守
- (3) 問合わせ先：東京大学大学院理学系研究科天文学教育研究センター 河野孝太郎
Tel: 0422-34-5021 E-mail: kkohn@ioa.s.u-tokyo.ac.jp

10. 応募上の注意

本研究科では、男女共同参画を積極的に推進しています。詳しくは下記URLの理学系研究科男女共同参画基本計画をご覧ください。

<https://www.s.u-tokyo.ac.jp/ja/overview/gender/>

研究者として旧姓使用をされている方は旧姓で応募書類を作成していただいて構いません。

賞の推薦

2023年度の島津賞・島津奨励賞の推薦募集

1. 島津賞候補者の推薦

わが国の科学技術振興のため、科学技術、主として科学計測に係る領域で、基礎的研究および応用・実用

化研究において、著しい成果をあげた功労者を表彰します。日本天文学会を含む島津賞・島津奨励賞推薦依頼学会から推薦のあった候補者を、選考委員会が選考し、島津科学技術振興財団理事会の審議を経て決定します。

毎年度1件、賞状、賞牌、副賞500万円を贈呈します。

2. 島津奨励賞候補者の推薦

わが国の科学技術振興のため、科学技術、主として科学計測に係る領域で、基礎的研究および応用・実用化研究において独創的成果をあげ、かつその研究の発展が期待される45歳以下(4月1日時点)の若手研究者を表彰します。日本天文学会を含む島津賞・島津奨励賞推薦依頼学会および当財団関係者から推薦のあった候補者を、選考委員会が選考し、島津科学技術振興財団理事会の審議を経て決定します。

毎年度3件以下、賞状、賞牌、副賞100万円を贈呈します。

3. 研究開発助成の募集(自由応募)

科学技術、主として科学計測に係る領域で、基礎的研究を対象とし、原則として、国内の研究機関に所属する45才以下の新進気鋭の研究者(国籍不問)に助成します。

総額2300万円(23件以下)。

■応募方法

必要書類一式を当財団ホームページよりダウンロードして提出ください。

島津科学技術振興財団ホームページ：<https://www.shimadzu.co.jp/ssf/award.html>

■募集締切

島津科学技術振興財団による締切りは、2023年7月31日(月)となっておりますが、島津賞、島津奨励賞の候補者については、日本天文学会から推薦をすることになりますので、必要書類は、**2023年7月12日(水) 必着で日本天文学会事務局長宛**に送付くださるようお願いいたします。

■島津科学技術振興財団 問い合わせ先

〒604-8445 京都市中京区西ノ京徳大寺町1番地
公益財団法人島津科学技術振興財団
事務局 TEL: (075)823-3240 FAX: (075)823-3241
URL: <https://www.shimadzu.co.jp/SSF>
E-mail: ssf@zaidan.shimadzu.co.jp

研究助成

公益財団法人住友財団 2023年度2件の研究助成

基礎科学研究助成

助成の趣旨：科学の進歩は社会の発展に大きな貢献を果たしてきました。科学は人類社会の未来を拓くことにつながるものです。

この助成は、重要でありながら研究資金が不十分とされている基礎科学研究、とりわけ新しい発想が期待される若手研究者による萌芽的な研究に対する支援を行うものです。

助成対象研究：理学(数学、物理学、化学、生物学)の各分野及びこれらの複数にまたがる分野の基礎研究で萌芽的なもの(それぞれの分野における工学の基礎となるものを含む。)

応募資格：「若手研究者」(個人または研究グループ)

①国籍に関係なく、日本の大学等の研究機関に所属し、申請に関する所属機関長の承諾がとれるのであれば応募可能です。

②上記①以外であっても、日本国籍を持つ者または日本に永住を許可されている外国人は、応募可能です。尚、海外の大学等の研究機関に所属している者は所属機関長の承諾を得ることが必要です。

尚、申請者の所属が営利企業等(兼務を含む)の場合には応募不可です。

助成金：総額1億5,000万円(1件当たり最大 500万円)

助成件数：90件程度

環境研究助成

助成の趣旨：現在、人類が直面している大きな問題の一つに環境問題があります。地球温暖化、オゾン層破壊、酸性雨、生物種の減少、食料と人口、砂漠化、公害等様々な問題があり、その原因の探究と解決策の模索が続けられています。

この助成は、環境問題の解決のためには、多面的アプローチによる分析と様々な対応策の構築が必要と考え、そのためのいろいろな観点(人文科学・社会科学・自然科学)からの研究に対する支援を行うものです。

助成対象研究：一般研究

環境に関する研究(分野は問いません。)

・課題研究：

2023年度募集課題

「激動の時代における環境問題の理解および解決のための学際研究または国際共同研究」

応募資格：研究者個人または研究グループ

①国籍に関係なく、日本の大学等の研究機関に所属し、申請に関する所属機関長の承諾がとれるのであれば応募可能です。

②上記①以外であっても、日本国籍を持つ者または日本に永住を許可されている外国人は、応募可能です。尚、海外の大学等の研究機関に所属している者は所属機関長の承諾を得ることが必要です。

尚、申請者の所属が営利企業等（兼務を含む）の場合には応募不可です。

助成金：総額1億円

一般研究 7,000万円 1件当たり最大 500万円

課題研究 3,000万円 1件当たり最大1,000万円

助成件数

一般研究 40件程度

課題研究 3件程度

共通事項

募集期間：2023年4月15日(土)～6月30日(金)

応募方法：財団ホームページ（本項最下部URL）から応募ページにアクセスし、手順に従って申請書類を作成して、システムにアップロードすることで申請を行って下さい。

連絡先：〒105-0012 東京都港区芝大門1-12-16 住友芝大門ビル2号館

公益財団法人 住友財団

TEL: 03-5473-0161 FAX: 03-5473-8471

E-mail: basic.science@sumitomo.or.jp

URL: <http://www.sumitomo.or.jp/>

会務案内

日本天文学会 2023年春季年会報告

2023年度春季年会は、3月13日(月)から16日(木)の4日間、立教大学（東京都豊島区）にて開催された。前回の秋季年会に続き、現地とオンラインの双方から講演・聴講ができる2回目のハイブリッド開催となった。講演件数は口頭講演が492件、ポスター講演が101件で、合計593件の講演があった。年会参加登録人数は会員1,017名、非会員80名の計1,097名（うち現地参加者は807名）であった。1件の企画セッションと、天文教育フォーラムを含む2件の特別セッションが開催された。開催地である立教大学および参加者の皆様のご理解とご協力により有効な年会とすることができた。参加者・関係者の皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。

座長は次頁の56名の方々に務めていただいた。会場・時間帯別にお名前を示し、感謝の意を表する。（敬称略）

〈記者会見〉

日本天文学会2023年春季年会記者会見は、年会前週の3月10日(金) 14:00からオンラインにて開催された。今回は、年会での学術発表に関する会見はなく、日本天文遺産と天文教育普及賞の発表を行った。まず、山本会長による挨拶、日本天文学会の組織と活動の概要、今春季年会の紹介を行った。その後、下記の日本天文遺産、天文教育普及賞についての記者発表を行った。当日は報道機関から4名の参加があった。メディアでの紹介は、3月28日現在で、少なくとも15件の報道を確認している。なお、本オンライン記者会見の司会は太田副会長が務めた。

第5回（2022年度）日本天文遺産（2件）

「大阪市立電気科学館プラネタリウム」

「仁科型電離箱」

松村雅文（香川大学）

第5回（2022年度）天文教育普及賞

「的川 泰宣氏」

土居守（東京大学）

（太田耕司、生田ちさと）

〈企画セッション〉

[ALMA サーベイによる星・惑星系形成研究の進展]

世話人：相川祐理，大橋永芳，坂井南美，富田賢吾

観測天文学において、多くの天体を観測しその結果を統計的にとらえることは、天体現象を理解する上で非常に重要である。ALMAでも、Cycle4から50時間を超えるラージ・プログラムの採択が始まり、最近はスタンダード・プログラムでも比較的大型のものが推奨されている。それに伴い、ALMAを用いた星・惑星系形成の観測的研究でも大規模な観測が大幅に進展し、星形成から、円盤形成、さらには惑星系形成へ至る物理・化学過程への理解が飛躍的に進みつつある。特に、原始惑星系円盤の分野では、FAUST、MAPS、eDiskなどのALMAラージ・プログラムが行われており、日本の研究者も主導的な立場で大いに活躍をしている。学会の通常のセッションではこれらラージ・プログラムの研究結果も個別の発表として単発的に行われることが多く、統計的な議論が難しい場合がある。そこで本企画セッションでは、近年のALMAサーベイによる星・円盤・惑星系形成の研究を俯瞰し、新たに得られた知見をまとめるとともに、それらの知見を組み合わせ、星・円盤・惑星の形成と進化を、物理と化学の両面から理論的な考察も加えつつ、総合的に理解することを目標とした。

	3月13日(月)	3月14日(火)		3月15日(水)	3月16日(木)	
	13:00-15:10	10:00-12:10	13:30-15:40	10:00-12:10	13:30-15:40	10:00-12:10
A	原始惑星系円盤 高橋実道 (国立天文台/ 鹿児島大学)	原始惑星系円盤 武藤恭之 (工学院大学)	観測機器 小高裕和 (大阪大学)	観測機器 海老沢研 (宇宙航空研究開発 機構)	観測機器 三石郁之 (名古屋大学)	観測機器 高橋弘充 (広島大学)
B	銀河団 赤堀卓也 (国立天文台)	教育・広報・他 下井倉ともみ (大妻女子大学)	教育・広報・他 土橋一仁 (東京学芸大学)	星形成 伊藤洋一 (兵庫県立大学)	星形成 徳田一起 (九州大学)	星形成 古家健次 (国立天文台)
C	ALMA サーベイ 田中圭 (東京工業大学)	ALMA サーベイ 大橋永芳 (中央研究院)	ALMA サーベイ 坂井南美 (理化学研究所)			
D	コンパクト天体 玉川徹 (理化学研究所)	コンパクト天体 樫山和巳 (東北大学)	コンパクト天体 野村真理子 (呉工業高等専門学校)	コンパクト天体 藤澤幸太郎 (東京大学)	コンパクト天体 土肥明 (理化学研究所)	コンパクト天体 川中宣太 (京都大学)
E	太陽 飯田佑輔 (新潟大学)	太陽 堀田英之 (千葉大学)	太陽 横山央明 (京都大学)	太陽 下条圭美 (国立天文台)	銀河 原田ななせ (国立天文台)	銀河 瀧崎智佳 (上越教育大学)
F	観測機器 松林和也 (東京大学)	観測機器 大屋真 (国立天文台)	観測機器 小西真広 (東京大学)	観測機器 谷津陽一 (東京工業大学)	観測機器 佐野圭 (九州工業大学)	
G	観測機器 宮本祐介 (福井工業大学)	観測機器 松尾宏 (国立天文台)	観測機器 久野成夫 (筑波大学)	宇宙論 宮武広直 (名古屋大学)	宇宙論 茅根裕司 (高エネルギー加速 器研究機構)	宇宙論 高橋龍一 (弘前大学)
H	銀河形成・進化 泉拓磨 (国立天文台)	銀河形成・進化 小野宜昭 (東京大学)	銀河形成・進化 嶋山里澄 (国立天文台)	銀河形成・進化 森正夫 (筑波大学)	銀河形成・進化 本原顕太郎 (国立天文台)	銀河形成・進化 石山智明 (千葉大学)
I	星間現象 信川正順 (奈良教育大学)	星間現象 大平豊 (東京大学)	星間現象 勝田哲 (埼玉大学)	星間現象 藤直美 (神奈川大学)	惑星系 藤井友香 (国立天文台)	惑星系 亀田真吾 (立教大学)
J	活動銀河核 秋山正幸 (東北大学)	活動銀河核 永井洋 (国立天文台)	活動銀河核 秦和弘 (国立天文台)	恒星・恒星進化 守屋堯 (国立天文台)	恒星・恒星進化 青木和光 (国立天文台)	恒星・恒星進化 野上大作 (京都大学)

本企画セッションは、3月13日午後及び翌14日の午前と午後、それぞれ2時間、合計6時間の3つのセッションからなり、基調講演5件、一般講演20件、ポスター講演1件の発表が行われた。基調講演は原始惑星系円盤分野のALMA ラージ・プログラムを中心に、京都大学の石山智明氏がFAUSTのサマリー、国立天文台の古家健次氏がMAPSのサマリー、台湾中央研究院の大橋永芳氏がeDiskのサマリーを行い、また、東北大学の富田賢吾氏が円盤形成の物理過程、東京大学の相川祐理氏が分子組成進化の観点から、ラージ・プログラムの結果を俯瞰した。一般講演でもFAUSTやeDiskで観測された各天体の観測結果がセッション内で連続的に報告された。一方で、ALMAのラージ・プログラム以外でもサーベイ型の研究が行われており、ペルセウス座の分子雲コアの化学的性質を明らかにするプログラム(PEACHES)、ALMAアーカイブを用いた太陽近傍星形成領域におけるアウトフ

ローの統計的研究、ALMAを用いた大小マゼラン雲の原始星サーベイプログラム(MAGOS)の成果についての発表があった。3つのセッションの最後には各10分程度の総合討論の時間を設け、そこでも参加者から活発な発言があり、議論をさらに深めることができた。セッションへの参加者は概ね50名程度だったと推測される。コロナ禍の影響で対面での発表や議論はしばらくできていなかったこともあり、参加者の満足度は比較的高かったのではないと思われる。本企画セッションが、サーベイ型研究の横のつながりが増えていくきっかけになれば幸いである。パラレルセッションという性質上、本企画セッションと並行して、原始惑星系円盤の通常セッションが行われることになり、関係する研究者の一部が本企画セッションに参加できなかった点は残念であった。今後、企画セッションを行う際には、並行して開催されるセッションとの組み合わせに注意を払う必要がある。最後に、本企

画セッションを有意義なものにしてくださった講演者や参加者の皆様、また、スムーズなセッション運営に多大なるご協力をいただいた学会運営関係者にこの場を借りて感謝させていただく。

〈特別セッション〉

[ALMA 2030: Wideband Sensitivity Upgrade]

世話人: Alvaro Gonzalez, 深川美里, 伊王野大介

3月13日(月)に「ALMA 2030: Wideband Sensitivity Upgrade」が開催された。本特別セッションは、科学運用の開始から10年を迎えたアルマ望遠鏡の現状を共有し、今後の機能強化計画「ALMA Wideband Sensitivity Upgrade (WSU)」の概要および装置開発について紹介し、2030年代におけるミリ波・サブミリ波サイエンスの展開についてコミュニティの皆様と議論することを目的として行われた。現地参加者は約100名、オンライン参加者は117名であった。

まず、東アジア地域アルマプロジェクトマネージャーのAlvaro Gonzalez氏から、アルマ望遠鏡の現状とWSUの概要について説明があった。WSUが実装されることで、受信機中間周波数が2-4倍拡張され、伝送系、デジタイザ、相関器の機能も大幅にアップグレードされることが説明された。

次に、東アジア地域アルマプロジェクトサイエンティストの甘日出文洋氏からは、WSUによって切り拓かれるミリ波・サブミリ波サイエンスの新展開についての講演があった。具体的なサイエンス例を通じて、アルマの連続波撮像効率が3倍以上、輝線撮像効率が2-3倍、そして高周波数分解能(0.1-0.2 km/s)の観測帯域幅が4-68倍向上することが説明され、特に分子輝線サーベイ観測において高い効率化が得られることが強調された。その後、Alvaro Gonzalez氏からWSUの装置開発についての説明があり、最後にアルマ科学諮問委員会副委員長の佐川英夫氏によってアルマ科学諮問委員会での議論が報告された。

全ての講演の後の全体討論・質疑応答では、膨大なデータを取り扱うための対策や、観測・データ解析方法、WSUにおける日本の役割など、幅広い内容の議論が行われた。

〈天文教育フォーラム〉

会期2日目となる3月14日の17:00より、年会K会場において天文教育フォーラムが開催され、現地とオンライン合わせておよそ110名の方にご参加頂いた。今回は「天文学研究/教育におけるダイバーシティ推進」をテーマとし、2名の招待講師をお迎えし、話題

提供をお願いした。

招待講演のお一人目として、男女共同参画委員長を務められている国立天文台の野村英子氏により、「日本天文学会における男女共同参画・ダイバーシティ」という題目でご講演頂いた。講演では主に2019年に実施された日本天文学会会員に対するアンケート調査の結果についてご紹介頂いた。その中で、1999年に実施された女性研究者問題アンケートと比較し、この20年間に日本天文学会内でのどのような変化があったかの考察がなされた。女性研究者の割合や継続率は20年間たった今でも低いこと、また、ハラスメント防止ガイドラインの設置やその認知など、20年間で進展のある項目もあるものの、依然として女性・男性研究者のハラスメント被害があることなど、改善の余地もあることが示され、男女問わず平等に社会生活を送れる環境整備が重要である点が強調された。

続いて、国立天文台の白田-佐藤功美子氏より、「女子中高生夏の学校(夏学)における日本天文学会の貢献」という題目でお話頂いた。夏学は日本天文学会の教育委員会と男女共同参画委員会が共同で参加している、理系分野における女子中高生のための合宿型研修事業である。ご講演では夏学の歴史や、日本天文学会がいかに夏学実施に貢献してきたかをご紹介頂いた。その中で、埼玉大学を始めとする本会会員が大きな貢献をしてきたこと、また夏学での日本天文学会の活動に協力した学生にとっても非常によい体験となってきたことが紹介された。

講演後には30分ほど、会場およびオンラインの参加者を交えての議論に時間が割かれた。会場からは多くの発言があり、進路の追跡調査の有無などについての質問がなされた。議論の中では、男女共同参画委員経験者やかつての夏学に参加した協力学生などの意見も紹介され、活発に意見交換がなされた。最後に、かつて夏学実施で活躍され、次期天文教育委員長に就任される予定の大朝由美子氏よりコメントを頂き、閉会となった。本フォーラムが本会におけるダイバーシティ推進を考えていく上での一助となれば幸いである。

(鷹野重之)

〈林忠四郎賞・研究奨励賞受賞記念講演〉

年会3日目の3月15日(水) 17:30から19:00までK会場にて2022年度林忠四郎賞および研究奨励賞の受賞記念講演が行われた。講演者および講演タイトルは以下の通りである。

林忠四郎賞

大須賀健氏(筑波大学)「シミュレーションとチームワークで挑む降着流・噴出流」

研究奨励賞

木村成生氏（東北大学）「ブラックホール天体での宇宙線加速と高エネルギー放射」
 野田博文氏（大阪大学）「X線観測と衛星搭載装置開発の両輪で迫る活動銀河核エンジン」
 藤本征史氏（テキサス大学オースティン校）「電波と光赤外線を用いた遠方銀河の観測的研究」

〈保育室〉

立教大学ミッチェル館・1階・R-103（エンゼルーム）にて、保育室を開設した。本年度では4家族4名が保育室を利用した。保育室の準備にあたり、立教大学スタッフの方々に様々なご協力をいただいたことを感謝する。

（大屋瑤子，市来浄興，浅井歩）

〈ジュニアセッション〉

第25回ジュニアセッションを、春季年会2日目の3月14日（火）に開催した。4年ぶりに現地会場に集うことになった今回だが、年会の他のセッションと同様、ハイブリッド形式で運営し、オンラインでの参加も可能とした。結果的に、57件の発表のうち42件が現地会場で行われた。参加者数は、現地会場が発表者生徒162名、指導者46名に加え、年会参加の研究者、保護者等その他の参加者、運営関係者合わせて約260名であった。オンライン参加者は、発表関係者が40接続、その他が45接続であった。特に学校関係者は複数名が一つの端末から参加しているケースが多く、参加者数は120名を超えると推定される。全体として約400名がセッションに参加したことになる。

当日は山本会長の挨拶に始まり、午前、午後それぞれ約2時間の口頭発表セッションを行った。座長は午前が江草実実（東京大学）、西沢敏（國學院大學栃木高等学校）、午後が藤井通子（東京大学）、林隆之（麻布中学校・麻布高等学校／国立天文台）の皆さんにお願いした。また、昼の時間帯と午後の口頭セッション終了後に、ポスターセッションを行った。ポスターセッションは、口頭発表の有無にかかわらず全員参加が基本で、熱気あふれる活発な議論が行われた。昨年まであったコロナ禍での部活動等の活動制限はかなり緩和されたようで、研究内容・発表やポスターセッションでの議論に、以前の活況が戻ってきたことを強く感じた。今年も例年同様、タイの高校生から5件の発表があった。残念ながらオンラインによる発表だったため、対面での深い議論ができなかったが、日本の発表者とは若干異なる視点での研究は、他の参加者の刺激になったことと思う。

口頭発表は1件あたり発表4分、質疑1分の時間枠で行った。現地での発表者は、事前収録動画の再生ではなく、その場で発表をしてもらう通常の方法に戻したが、交代のオーバーヘッドもあり午前、午後ともに大幅に時間を超過してしまった。これは、プログラム編成時にある程度想定していたことではあるが、ポスターセッションの時間を短縮せざるを得なかったことは、運営上反省と改善が必要であると認識している。

ハイブリッド開催への対応は、口頭セッションについては他のセッションと同様、会場とオンライン参加者をZoomでつないで行った。年会実行委員会に蓄積されたノウハウと、会場の立教大学の設備に助けられ、大きなトラブル無く進めることができた。一方ポスターセッションについては、現地とオンラインで環境が大きく異なるため、それぞれ独立にセッションを行うこととした。昨年の反省を踏まえ、Zoomのブレイクアウトルームは9件ずつ2グループとし、また急遽、大澤亮（国立天文台）、馬場俊介（鹿児島大学）のお二人に進行役として参加していただくことにした。昨年に比べて議論は活性化したが、やはり現地でのポスターセッションに比べて参加者の戸惑いも多く、今後への課題として残された。

久しぶりの現地開催であったことに加え、初めてのハイブリッド開催、また感染対策など対応事項は多く、実行委員会・世話人は総出で運営に参加した。現地会場においては、北本開催地理事を始めとする立教大学スタッフの皆様にも多大なるご支援・ご配慮をいただき、つつがなく進行することができた。改めて感謝したい。

ジュニアセッション実行委員会では、今回の経験と反省を元に、今後も運営方法の改善をはかっていく。ジュニアセッションでは、例年参加者同士またプロの研究者との深い議論を行うことで、生徒たちのみならず指導する先生方も強い刺激を受けて、天文学研究への理解と研究力向上につながってきた。引き続き天文学会会員の皆様のご理解とご協力をお願いしたい。

最後になったが、本ジュニアセッションは、日本天文学会が主催し、日本天文教育普及研究会が共催、日本学術会議が後援した。参加者およびご協力いただいた関係各位に篤く御礼申し上げる。

（山村一誠）

〈公開講演会〉

年会開始前日、3月12日（日）の13:30-16:00にかけて、立教大学池袋キャンパス内の太刀川記念館太刀川カンファレンスホールおよびZoomウェビナーによるハイブリッド型で公開講演会を開催した。「ブラックホール物理と星・惑星科学—ブラックホールの観測

と惑星探査一」と題し、山田真也氏（立教大学）および亀田真吾氏（立教大学）が講師をつとめられた。講演会は立教大学の戸悠人氏の司会により進行し、冒頭で山本智会長（東京大学）が挨拶を行った後、天文教育理事の富田晃彦氏（和歌山大学）の挨拶が続き、講演が始まった。

山田氏は「X線で見えるブラックホール」と題し、X線とは何かということから、初期のX線観測、そしてブラックホールの解説と、最新の情報を含む観測結果、最後にXRISM衛星を中心に今後の観測について解説した。質問は「X線では軽い元素も見えるのですか？」というようなX線観測の事、「ブラックホールの質量はどうやって測るのですか？」「M106のX線画像の解釈は何かあるのですか？」「古典力学でブラックホールは理解できないのですか？」等ブラックホールに関する質問も多くあり、多くの人が興味をより深く掘り下げてくれた。

小休憩の後、亀田氏が「はやぶさ2の小惑星旅行」と題し、小惑星探査機「はやぶさ2」について解説した。そのなかで、探査機「はやぶさ2」に搭載していたカメラの一つ（光学航行カメラ）は、研究室の学生と一緒に作りあげたものであるという話、と共に、「はやぶさ2」でタッチダウンする時に使ったターゲットマーカと同じ材質の反射材を会場に向け、それを会場の参加者にカメラで撮影してもらい、ターゲットマーカの高い反射率と反射材の特徴について体感してもらった。質問は、講演で説明したいわば古典的な太陽系形成過程に関連して、それでは系外惑星、特にホットジュピターは説明できないのではないかとという予備知識に基づいた大変良い質問があった。また、社会人の方から、失敗のできない運用を1度で成功させた勝因は何か、といった質問があった。惑星探査や惑星形成に関する興味をより強く持って頂けたと考えられる。

最終的な現地参加申込者は26名、実際の参加者は、申込者のうちおよそ20名と大学関係者等10名の合計およそ30名だった。また、オンライン申込者は66名で、実際のオンライン参加者は73名と、残念ながら多くはなかった。もう少し広報活動に力を入れる必要があった。

参加者がさらに宇宙に興味を持ち、宇宙の研究のみならず学術研究に理解をもってもらえたなら、公開講演会の企画・運営をした者としてこの上ない喜びである。最後にこの場を借りて、機材借用等多大なご協力を頂いた立教大学メディアセンター、会場の準備をしていただいた方々、講師の方々、関係者の方々、そして参加者の皆様に感謝の意を表したい。

（一戸悠人、北本俊二）
（年会実行委員長：古澤久徳）

入会・移籍・退会のお知らせ

2023年3月10日に開催された公益社団法人日本天文学会理事会において、正式に入会・移籍が承認された方、退会が報告された方の人数をお知らせします。

入会 正会員：25名 準会員：6名
退会 正会員：12名 準会員：2名
移籍 準→正：1名 正→準：13名

2024年度国内研修支援金（旧内地留学奨学金）の希望者の募集

国内研修支援金は、日本国内の大学や各地の天文台、宇宙関連の施設などの研究機関で研究者の指導を受けて研究活動を行う際の消耗品・旅費等の経費の支援をするものです。

日本天文学会会員でアマチュア天文研究者、学校の教員、科学館・プラネタリウム・公共天文台などの社会教育施設の職員（退職された方も含む）が主な対象です。学部生の応募も可能です。

過去の支援金の対象となった研究テーマは、学会ホームページの学会の活動から研究・旅費助成⇒国内研修支援金⇒参考：国内研修支援金受給者一覧のボタンで見ることができます。

(<https://www.asj.or.jp/jp/activities/expenses/kensyu/recipients/>)に掲載されています。

なお、研究内容にふさわしい機関や指導者がわからない場合は、早めに国内研修支援金選考委員長にご相談ください。多くの方々の応募をお待ちしています。

〈募集要項〉

応募資格：応募時点で日本天文学会会員であること（内規第3条）。

採択数：若干名

研修期間：2024年4月から2025年3月までの12カ月間のうち希望する期間。受入研究機関、指導教員（受入研究者）と相談して決定してください。研究終了後、2カ月以内に研究報告書の提出をお願いいたします。

支給額：25万円以下。支給は2024年4月を予定。

申込み：応募申請書に必要事項を記入し、

〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1

国立天文台内日本天文学会事務長あてに郵送、または電子ファイルをjimucho@asj.or.jpあてにメール送付してください。

応募締切：2023年8月31日(木) 必着。

審査：国内研修支援金選考委員会（内規第5条）で審査のうえ、決定し、10月中旬に通知します。

採択された場合：研修終了後には研修成果報告書を必ず書いて提出してください。

応募用紙：日本天文学会事務所にあります。申請書の書き方例もありますので、事務所にご請求ください。学会ホームページ（「研究・旅費助成」の「国内研修支援金」のページ中：募集と応募申請の項目、<https://www.asj.or.jp/jp/activities/expenses/kensyu/>）からもダウンロードできます。なお、国内研修支援金に関する内規は学会ホームページ（「定款・細則・内規」のページ中、<https://www.asj.or.jp/jp/about/articles/#naichi>）に掲載されています。

相談・問合せ先：（次期）国内研修支援金選考委員長 関口朋彦 kokunai-kenshu@asj.or.jp

編集委員会より

退任の言葉

4年半ほどの任期を、何とか無事(?)に終えることができました。右も左もわからない状態で委員になったのに、最後の2年間は編集委員長という大役を仰せつかり、著者・読者・編集委員・事務などの多くの方々に助けていただきました。本当にありがとうございました。

任期中の大半がコロナ禍で、他の委員の皆さまと顔を合わせる機会がほとんど無かったことだけが残念ですが、オンライン会議やメールでのやり取りからでも新しい企画や良いアイデアが生まれたように思います。

今後は気楽な一読者として、月報を楽しみにしています。

(江草芙美)

2期4年間、編集委員を務めさせていただきました。前任の方から連絡を受けた際、任期付きの身分として一度はお断りをしたのですが、再度強くお願いされ、お受けしたのが4年半前でした。

個人的に思い入れがあるのは自分で企画・担当をし、衛星打ち上げ直後に掲載されたJWSTサイエンス特集です。企画の提案はJWST打ち上げ予定の半年ほど前で、当時私はドイツにいたのですが、朝早起きをしてZoomで行われた編集会議で提案をし、他の編集委員の方からもGoサインをいただいたのを覚えています。その後西澤さんにも担当に入ってください、JWSTの観測時間を取得した方々に執筆をお願いし、裏話も含めて天文月報ならではの記事が勢揃いしまし

た。今読み返してみても、日本のJWSTサイエンスを網羅的に理解できる唯一の日本語記事と言ってよいかと思います。これを読んでいる稀有な読者は2022年2、3月号をぜひ手にとってみてください。実際にJWSTの初期成果をバンバンだしている方々の日本語記事が読めますよ。

天文月報は非常に歴史のある雑誌で、その雑誌に自分の企画記事が残ったことは、個人的に感慨深いものがあります。その一方で、表には見えない仕事もたくさんあり、編集部と編集委員の努力でこの雑誌が成り立っていることがわかります。

そういうウラガワに興味がある方はいらっしゃいますか？

物は試し、経験するのが一番です。ぜひ編集委員に名乗りを上げてみてください。

(市川幸平)

会員になれば毎月送られてくる天文月報ですが、編集委員になってみると、その仕事は結構大変で時間を取られることを知りました。毎月欠かさず発行されてきたことは、これまで編集委員を務められてきた諸先輩や天文学会事務の皆様の多大なる努力の結果と痛感しました。そのような雑誌に少しでも貢献できたなら大変嬉しいです。

天文月報の記事は編集過程で専門分野の異なる複数の編集委員が目を通すのですが、だんだんと読みやすい記述になっていく様子は時として興味深く、分かりやすい文章を書く勉強にもなりました。お世話になった皆様、大変ありがとうございました。今後も読者として、時には著者として天文月報を楽しみたいと思います。

(岩井一正)

天文月報編集委員2期4年間の任期がもうすぐ終わろうとしています。当初は軽い気持ちで引き受けたということもあり、忙しい研究と同時にこなすことは大変でしたが、前任の山田真也さんの「編集委員になると他分野の記事を強制的に読むことになり、とても勉強になる」という言葉は本当で、非常にありがたかったと思っています。

また、私はもともとアマチュア天文学が好きで、アマチュアの方々の記事に描かれた創意工夫と情熱にも感銘を受けました。本来はもう少し自ら積極的に記事を集めたり、企画に携わりたかったなどという気持ちもありますが、これで退任となります。常に返信の滞りがちな私に対して、今井さん・栗田さんはいつもの確にサポートしてくださり大いに感謝しています。今後

も天文月報から素晴らしい記事が発信されることを楽しみにしています。

(小高裕和)

2期4年にわたって編集委員を務めさせていただきました。編集委員は天文学研究者が務めるものだと思いますので、天文の教育普及を仕事とする私に声がかかるとは夢にも思っていませんでした。

任期中は自分の立場を活かすべく、掲載予定の原稿を確認する際は、一般の人にもわかりやすい内容や表現になっているかという点にも気を使いました。特集も2度組ませていただきましたが、少しでも貢献できていたようでしたら幸いです。

この4年間は、今までで最も天文月報をしっかり読み(反省…)、自ら勉強し、改めて面白さを再認識した期間でもありました。今後も応援し続けたいと思います。ありがとうございました。

(嘉数次人)

編集委員として4年半お世話になりました。編集作業を通じて多くの天文分野の方と交流し、専門である太陽以外の文章の校閲にも沢山当たらせていただいたことでとても勉強になりました。小宮山編集委員長、松田編集委員長、江草編集委員長、編集委員の皆様、また月報係の今井さん、栗田さんには大変お世話になりました。

私にとって編集委員の仕事は、分野外の人にいかに関心を持ってもらえるようにするかが課題でした。私自身にとっても分野外の記事は慣れない言葉が多く苦労しました。その一つに天文学における様々な単位があります。

編集委員の作業効率化と文章の理解しやすさの議論の中で、他学会誌のようにある程度の統一を提案する意見と、自分達にはそのままが一番わかりやすいという意見とで割れて議論をしたのが一番印象に残っています。また編集委員就任当初は三鷹の天文台の一室にて月一で編集委員会が行われていたのが、コロナ禍を経てリモート化した今となっては懐かしく感じられます。

予算や人員の問題もあり、月報運営も困難なことがあるかもしれませんが、天文月報が今後も天文学会員の研究交流と、高校大学生やアマチュア天文家の興味関心につながるような存在であり続けてくれると嬉しく思います。

次期編集委員の方々どうぞ宜しくお願いいたします。

(西塚直人)

2019年度から2期4年にわたり編集委員を務めさせていただきました。振り返るとその大半がコロナ禍という、前例のないものでした。こうした状況の中でも編集委員の皆さんや学会月報係の今井さん・栗田さんと知恵を出し合い、オンライン記事無料公開など読者に寄り添った対応ができたことはとても良かったと思います。一方、一編集委員としては、専門分野のEHT特集など何度かさせてもらった反面、もう少し色々な分野の人から記事を集めてくるべきだったなあと反省しています。次期編集委員の皆様にはこのあたりを期待したいです。今後は一読者に戻りますが、裏方の皆様のご苦勞を想像しながら天文月報を楽しみにしています。最後に、月報係の今井さん・栗田さん、任期中に委員長を務められた松田さん・江草さんにはこの場を借りて深く感謝申し上げます。

(秦和弘)

4年半に渡り編集委員を務めさせていただきました。定期的に訪れる原稿の校閲や最終確認作業は、やや負担に感じることもありましたが、自分の専門外の研究内容を知る良い機会にもなり、楽しみながら担当させていただきました。また、2期目には「ハビタブル系外惑星」、「アストロケミストリー」、そして「光赤外位置天文学」の特集を担当させていただきました。これらの現在ホットなテーマについて最先端の研究内容を読者に届けることが出来て、多少は天文学コミュニティに貢献が出来たかなと感じています。

今後も、一読者として天文月報を楽しませていただきたいと思います。

ありがとうございました。

(福井暁彦)

天文月報の編集委員を引き受けて2期4年が経ち、この5月で退任することとなりました。4年前はちょうどせいめい望遠鏡の科学観測が始まった頃で、その初期成果についての特集を担当することができたのは幸運でした。記事の校閲やチェックなどでは自分の専門とは違う記事をじっくりと(出版前に)読むことができ、いろいろ勉強になることも多かったです。本業で忙しい時期など記事のチェックを終えるのがぎりぎりになってしまうことも多くご迷惑をおかけしてしまったかもしれませんが、執筆者の方々や、他の編集委員の方々、月報係の今井さん、栗田さんのご協力が無事に勤め上げることができました。この場を借りてお礼申し上げます。

(前原裕之)

訃 報

会員の山崎魏氏は2023年2月17日に逝去されました。満88歳でした。ご冥福をお祈り申し上げます。

編集委員会より**天文月報記事投稿用アップローダー**

https://www.asj.or.jp/jp/activities/geppou/author_submission/

■ログイン

ユーザー名: geppou パスワード: toukou

■アップロードの仕方

アップロード画面で必要事項を埋めてください。するとアップロードに進むことができます。できる限りファイルは1つにまとめてください。ファイルが複数ある場合は「複数のファイルを投稿する」ボタンを押してください。押すたびに欄が増えます。1回あたり全部で最大50 Mbyteまで、個数は20個まで送信できます。それ以上の巨大なファイルのアップロードは推奨されませんが、やむをえない場合は分割してお送りください。

■注意

投稿者の個人の認証はcookieを利用しています。したがってcookieを受け取らないブラウザでは使えません。

またフォームのチェックや可変個数のアップロード

ボックスはjavascriptを利用していますのでjavascriptが使えなければこのアップローダーは使えません。

その場合はtougou@geppou.asj.or.jpまでメールでご投稿ください。

■連絡先

アップローダーに関するご質問はtougou@geppou.asj.or.jpまでお願いします。

(天文月報編集長)

天文月報記事ご執筆用テンプレート

SKYLIGHT, EUREKA, 天球儀などのご執筆にあたりましては、日本天文学会HP内「天文月報」のページにあります「投稿用テンプレート」をご活用ください。

https://www.asj.or.jp/jp/activities/geppou/author_template/

TeX・LaTeXで執筆される方はテンプレートをオンライン上またはダウンロードしてご利用ください。MSWordで執筆される方はwordテンプレートをダウンロードしてご利用ください。また、ご執筆の前に必ず「執筆マニュアル」をご一読ください。

https://www.asj.or.jp/jp/activities/geppou/author_manual/texをご利用される場合は、あわせてreadmeもお読み下さい。

また、ご利用にあたって不具合を発見された方は、編集委員会までご連絡をお願い申し上げます。

天文月報オンラインのIDとパスワード

ID: asj 2023

パスワード: 雑誌コード (5桁の数字) と **vol116** (6文字) の計11文字を入力してください。「雑誌コード」とは印刷版の月報の裏表紙の右下に書かれている「雑誌○○○○○—▲」の○○○○○の部分です。○○○○○は各号共通の数字です。

編集委員: 江草芙実 (委員長), 市川幸平, 岩井一正, 岩崎一成, 小高裕和, 小野寺仁人, 嘉数次人, 勝田哲, 川中宣太, 津村耕司, 西澤淳, 西塚直人, 秦和弘, 福井暁彦, 仏坂健太, 前原裕之

令和5年5月20日 発行人 〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1 国立天文台内 公益社団法人 日本天文学会

印刷発行 印刷所 〒162-0801 新宿区山吹町332-6 株式会社 国際文献社

定価733円 (本体667円) 発行所 〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1 国立天文台内 公益社団法人 日本天文学会

Tel: 0422-31-1359 (事務所) / 0422-31-5488 (月報) Fax: 0422-31-5487 振替口座00160-1-13595

日本天文学会のウェブサイト <https://www.asj.or.jp/> 月報編集 e-mail: toukou@geppou.asj.or.jp

会費には天文月報購読料が含まれます。

©公益社団法人日本天文学会 2023年 (本誌掲載記事は無断転載を禁じます)